

『源氏物語』 朱雀帝論

——「物語」としての存在意義を問う——

高 橋 彩

はじめに

朱雀帝は、桐壺帝の第一皇子であり、右大臣の娘、弘徽殿太后を生母に持つ。光源氏の異母兄にあたり、二十四歳で即位した。柔和な性格で、光源氏に優しく接し、臘月夜との密通事件が起こっても、彼女を許して寵愛する。しかし、母后と祖父右大臣からの圧力を受け、光源氏を須磨に流す。夢の中で桐壺帝に叱責され、心労から眼病を患った後、光源氏を召還し、異母弟冷泉帝に三十二歳で譲位した。彼は四十二、三歳頃に出家を思い立ち、娘、女三の宮の婿選びについて、多くの貴公子を吟味するも、最後は四十歳を迎える光源氏に、正妻として半ば強引に降嫁させた。

朱雀帝の登場は光源氏誕生と同時期の「桐壺」の巻からであるにも関わらず、「賢木」の巻までに朱雀帝自身の心情、具体的な容姿は一切記されない。登場部分の少なさにより、『源氏物語』第一部における朱雀帝の先行研究は少ない。そして、第二部において女三の宮降嫁を巡って急に物語の表舞台に登場する様子が、性格の急変、光源氏への復讐劇の開始などと評価される。この原動力を、娘、女三の宮を鍾愛する「人の親の心は闇にあらねども」の部分から、「心

の闇」によるものと藤本勝義は論じる⁽³⁾。しかし、第二部における朱雀帝の行動力などが女三の宮を思う「心の闇」のみであったとしても、女三の宮の存在が表面化したのは「若菜上」の巻からである。朱雀帝は第一部において、譲位後、在位中見られなかった側面を見せる。六条院行幸において皆が華々しく光源氏の栄華を讃えている中、朱雀帝は一人だけ恨めしげに詠歌する。「恨めしげ」は草子地で記され、朱雀帝の寂寥感が周囲の華やかさと対比、強調されている。これらを、親子の情による「心の闇」のみによるものと捉えることは難しい。本論では、先行研究でも言及の少ない第一部における朱雀帝を精査する。そして第二部への展開の様子、本編全体を通して、朱雀帝は光源氏にとってどのような存在であるか位置付け、そのうえで『源氏物語』の一つの在り方を論じる。

一 第一部 東宮時代、在位中の主体性の無い朱雀帝

朱雀帝は「疑ひなき儲の君」（桐壺）①一八頁）として登場する。母は桐壺帝の東宮時代から入内した妃であり、後見は右大臣家である。藤壺中宮の兄、兵部卿の宮など、先帝の御子を押しのけて立太子する。しかし、朱雀帝と光源氏両名の幼少期を比較すると、光源

氏が帝の秘蔵つ子として寵愛される描写の中で、朱雀帝の袴着、元服の儀式が省略されている点が、朱雀帝が光源氏の影のような存在であることが一層強調される。

この御子（光源氏）三つになりたまふ年、御袴着のこと一の宮のたてまつりしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くして、いみじうせさせたまふ。

〔桐壺〕①二二頁

一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式、よそほしかりし御響きに落とさせたまはず。所々の響など、内蔵寮、穀倉院など、公事に仕うまつれる、おろそかなることもぞと、とりわき仰せ言ありて、清らを尽くして仕うまつれり。

〔桐壺〕①四五頁

光源氏の存在は、朱雀帝と対比されることで一層際立つ。朱雀帝自身の考え、様子は語られないまま、朱雀帝の存在感は薄くなる。その上、朱雀帝は彼が在位する間、ほとんど主体性が見られない帝として描かれる。その根拠は、「賢木」の巻で、帝となった彼への周囲からの評価によってその片鱗が見える。

御位を去らせたまふといふばかりにこそあれ、世のまつりごとをしづめさせたまへることも、我が御世の同じことにておはしまいつるを、帝（朱雀帝）はいと若うおはします、祖父大臣、いと急にさがなくおはして、その御ままになりなむ世を、いかならむと、上達部、殿上人、皆思ひ嘆く。

〔賢木〕②九七—九八頁

帝は、院の御遺言違へず、あはれに思したれど、若うおはしますうちにも、御心なよびたるかたに過ぎて、強きところおはしまさぬなるべし、母后、祖父大臣とりどりしたまふことは、え背かせたまはず、世のまつりごと、御心になはぬやうなり。

〔賢木〕②一〇四頁

「いと若うおはします」「若うおはします」という言葉が、地の文で繰り返し見られる。朱雀帝が年齢として「若い」のではなく、母や祖父右大臣に振り回されてばかりで、朱雀帝自身は「未熟で頼りない」という評価が下されているということである。地の文で記されている点から、崩御した桐壺帝と比較した、世間一般の朱雀帝の評価と考えられる。年齢にそぐわず「御心なよびたるかたに過ぎて」いる、柔和で妥協的な性格が、未熟で頼りない様子を表している。それは光源氏に対して憤る弘徽殿大后の言葉にも表れる。

「帝と聞こゆれど、昔より皆人思ひ落としきこえて、致仕の大臣（左大臣。光源氏の舅）も、またなくかしづく一つ女（葵の上）を、兄の坊にておはするにはたてまつらで、弟の源氏にて、いときなきが元服の副臥にとり分き、また、この君をも宮仕へにと心ざしてはべりしに、をこがましかりしありさまなりしを、誰れも誰れもあやしとやは思したりし。」〔賢木〕②一四八頁

左大臣が光源氏に葵の上をあてがったことを始めとして、朱雀帝は光源氏よりも軽んじられていることを大后は承知している。気性

の強い弘徽殿太后と祖父右大臣の存在が強く、朱雀帝自身に思うことがあっても実行ができない現状は、帝の主体性が強い桐壺帝の御代と対照的である。そして朱雀帝の御代における「摂関政治」は、完全ではない。朱雀帝は須磨流謫以前から、桐壺帝の遺言を意識してきた。桐壺帝の遺言は次の通りである。

弱き御心地にも、春宮（冷泉帝）の御事を、返す返す聞こえさせたまひて、次には大将の御こと、「はべりつる世に変はらず、大小のことを隔てず、何ごとも御後見と思せ。齢のほどよりは、世をまつりごたむにも、をさをさ憚りあるまじうなむ、見たまふる。かならず世の中たもつべき相ある人なり。さるによりて、わづらはしさに、親王にもなさず、ただ人にて、朝廷の御後見をせさせむと、思ひたまへしなり。その心違へさせたまふな」と、あはれなる御遺言ども多かりけれど、女のまねぶべきことにしあらねば、この片端だにかたはらいいたし。帝（朱雀帝）も、いと悲しと思して、さらに違へきこえさすまじきよしを、返す返す聞こえさせたまふ。

〔賢木〕②九六頁

桐壺帝の遺言は、冷泉帝、光源氏の処遇を託す形で、朱雀帝の御代に自身の恣意を入れる。朱雀帝は「いと悲し」、「返す返す聞こえさせたまふ」と、正面から遺言を受け止めた。以降、朱雀帝の判断基準の柱は、この桐壺帝の遺言となる。

春宮（冷泉帝）をば、今の皇子になしてなど、のたまはせ置きしかば、とりわきて心ざしものすれど、ことにさしわきたるさ

まにも、何ごとをかほとてこそ。年のほどよりも、御手などのわざとかしこころそのしたまふべけれ。何ごとも、はかばかしからぬみづからの面起こしになむ。

〔賢木〕②一二四頁—一二五頁

左の大臣も、公私ひき変へたる世のありさまに、もの憂く思して、致仕の表たてまつりたまふを、帝は、院のやむごとなく重き御後見と思して、長き世のかためと聞こえ置きたまひし御遺言を思し召すに、捨てがたきものに思ひきこえたまへるに、かひなきことと、たびたび用ゐさせたまはねど、せめて返さひ申したまひて、籠もりゐたまひぬ。

〔賢木〕②二三八頁

遺言の中に、冷泉帝を「今の皇子になして」という内容は見られないが、遺言に従っているのだという朱雀帝の主張ともとれる。また、光源氏の舅である左大臣の辞表を受けて、父帝の代を意識している。そして「須磨」の巻から、遺言に背いて光源氏を須磨に流し、朱雀帝は精神的苦痛を抱える。

御遊びのついでに、「その人（光源氏）のなきこそ、いとさうざうしけれ。いかにましてさ思ふ人多からむ。何ごとも光なき心地するかな」とのたまはせて、「院（桐壺帝）の思しのたまはせし御心を違へつるかな。罪得らむかし」とて、涙ぐませたまふに、え念じたまはず。

〔須磨〕②一九七頁

「今まで御子たちのなきこそ、さうざうしけれ。春宮（冷泉帝）

を院（桐壺帝）のたまはせしさに思へど、よからぬことも出で来れば、心苦しう」など、世を御心のほかにまつりごちなしたまふ人びとのあるに、若き御心の、強きところなきほどにて、いとほしと思したることも多かり。

〔須磨〕②一九八頁

臘月夜と光源氏の交際を「今はじめたることならばこそあらめ。さも心交はさむに、似げなかるまじき人のあはひなりかし」（賢木）②一二四頁と咎めなかったことから、朱雀帝自身、「罪」と認識していない。須磨流謫は弘徽殿太后と祖父右大臣が光源氏の失脚を狙って密通をフレームアップした結果である。桐壺帝の遺言への罪悪感も重なり、朱雀帝は眼病を患う。母后や祖父右大臣の意向と、父帝の遺言の板挟みに陥っている。この板挟みの後、桐壺帝を夢に見た朱雀帝は光源氏に帰京の宣旨を下した。

三月十三日、雷鳴りひらめき、雨風騒がしき夜、帝（朱雀帝）の御夢に、院の帝（桐壺帝）、御前の御階のもとに立たせたまひて、御けしきいと悪しうて、にらみきこえさせたまふを、かしこまりておはします。聞こえさせたまふことも多かり。源氏の御事なりけむかし。（中略）「なほ、この源氏の君、まことに犯しなきにてかく沈むならば、かならずこの報いありなむとむおぼえはべる。今は、なほもとの位をも賜ひてむ」

〔明石〕二五一—二五二頁

臘月夜と光源氏の逢瀬が「罪ではない」と認識していた朱雀帝は、

桐壺帝が夢に現れたことで光源氏が「まことに犯しなき」であることに確信を持つ。

「疑ひなき儲の君」として生まれた朱雀帝は、右大臣家と生母の権勢で「公人」として最上の位置にいるが、父桐壺帝の光源氏鍾愛により、光源氏に劣る。父帝の遺言を意識するあまり、母后や右大臣家との思惑の板挟みになる。東宮時代、在位中の朱雀帝は、父桐壺帝と違って主体性が無いことが指摘できる。

二 第一部 讓位後、帝としての自意識が見られる朱雀帝

「絵合」の巻、「少女」の巻、「藤裏葉」の巻は冷泉帝の御代で、朱雀帝は板挟みから解放された。政治的介入をしない朱雀帝は、徐々に今までの姿勢を崩す。それは、「絵合」の巻における歌、そして「少女」の巻、「藤裏葉」の巻における唱和から見られる。

「絵合」の巻で、朱雀帝は、かつて六条御息所が死去した際に、自分に入内することを望んでいた斎宮の女御（秋好中宮）へ秘蔵の絵を贈る際、贈答する。

かの大極殿の御輿寄せたる所の、神々しきに、

身こそかくしめの外なれそのかみの心のうちを忘れしもせず

（朱雀院）

とのみあり。聞こえたまはざらむも、いとかたじけなければ、苦しう思しながら、昔の御髪ざしの端をいささか折りて、

しめのうちは昔にあらぬ心地して神代のことも今ぞ恋しき

（斎宮の女御）

とて、縹の唐の紙に包みて参らせたまふ。御使の禄など、いとなまめかし。院の帝（朱雀院）御覧するに、限りなくあはれと思すにぞ、ありし世を取り返さまほしく思ほしける。大臣をもつらしと思ひきこえさせたまひけむかし。過ぎにし方の御報いにやありけむ。

〔絵合〕②三八三—三八五頁

「身こそかく……」から始まる朱雀帝の和歌は、女御の齋宮時代を忘れていないと詠む。「しめの外」という言葉には、「注連の外」「占めの外」「宮中の外」がかけられる。返歌、「しめのうちは……」にも用いられ、女御が齋宮時代を懐かしむ歌となる。「神代」は贈歌「その神」に対応し、朱雀帝の御代を指す。女御は朱雀帝の御代の齋宮で御代の象徴の一つでもある。

朱雀帝は退位して宮中の外、女御は宮中の内にいるため、二人の間には距離が生まれている。「ありし世を取り返さまほしく思ほしける」には、かつてその距離が無かった自分の御代を思い、取り戻したいという思いが見られる。仮に実現しても、朱雀帝の御代で女御は齋宮であるのだから、朱雀帝とは結ばれない。女御と契ることを望むことに終始せず、帝としての自意識が呼び覚まされる部分であると考えられる。

続けて、「少女」の巻、「藤裏葉」の巻で、朱雀帝は自身の御代を振り返りながら唱和に参加する。

春鶯囀舞ふほどに、昔の花の宴のほど思し出でて、院の帝（朱雀帝）、「また、さばかりのこと見てんや」とのたまはするにつけて、その世のことあはれに思しつづけらる。舞ひはつるほど

に、大臣（光源氏）、院（朱雀帝）に御土器参りたまふ。

鶯のさへづる声は昔にて睦れし花の蔭ぞ変はれる（光源氏）
院の上、

九重をかすみ隔つるすみかにも春と告げくる鶯の声（朱雀帝）

帥の宮と聞こえし、今は兵部卿にて、今の上に御土器参りたまふ。

いにしへを吹き伝へたる笛竹にさへづる鳥の音さへ変はらぬ
（蚩兵部卿宮）

あざやかに奏しなしたまへる、用意ことにめでたし。取らせたまひて、

鶯の昔を恋ひてさへづるは木伝ふ花の色やあせたる（冷泉帝）

とのたはする御ありさまこよなくゆゑゆゑしくおはします。

〔少女〕③七二頁—七三頁

「さばかりのこと」は、「花宴」の巻に見られる南殿の宴である。春鶯囀に感興をもよおし、朱雀帝は光源氏に舞楽を舞うことを勧めた。光源氏が詠む「鶯のさへづる声」はこの曲のことを指す。春鶯囀の楽曲は昔のままだが、南殿で催されていた楽曲が仙洞御所で催され、場所と花木も変わったと詠う。桐壺帝の御代からの変遷に、感慨を込めて詠む。朱雀帝は光源氏の歌を受け、自分自身が内裏から離れた存在であることを上の句で詠う。そして「九重」から上皇御所へ移り、春霞を間に隔たった存在であるということを表す。「春

とつづくる鶯の声」には、冷泉帝、光源氏の来訪と春鶯囀を含める。自分が宮中と距離のある存在であると詠う部分に、朱雀帝の寂寥が見られる。

蛭兵部卿宮はこの唱和に続けて「あざやかに奏しなし」た。御代の変遷を詠む光源氏の歌、朱雀帝の歌による寂寥を、当代は二人の父桐壺帝の御代、「いにしへ」と変わらないと讃える。蛭兵部卿宮の和歌により、朱雀帝の寂寥は一度隠された。

しかしこの寂寥は、「藤裏葉」の巻、六条院の行幸でも見られた。この行幸は「朱雀院の紅葉の賀、例の古事思し出でらる。」（「藤裏葉」③四六〇頁）とされ、かつて「紅葉賀」の巻、桐壺帝の御代を想起させる華やかな宴となった。光源氏と太政大臣は桐壺帝の御代を想起して詠歌する。しかし、後半、朱雀帝は宴の華やかさの反面、寂寥感ある歌を詠む。

楽所などおどろおどろしくはせず。上の御遊び始まりて、書司の御琴ども召す。物の興切なるほどに、御前にみな御琴どもまゐれり。宇多法師の変はらぬ声も、朱雀院は、いとめづらしくあはれに聞こしめす。

秋をへて時雨ふりぬる里人もかかる紅葉の折をこそ見ね（朱雀帝）

恨めしげにぞ思したるや。帝、

世の常の紅葉とや見るいにしへのためしにひける庭の錦を（冷泉帝）

と、聞こえ知らせたまふ。御容貌いよいよねびととのほりたまひて、ただ一つものと見えさせたまふを、中納言さぶらひたま

ふが、ことことならぬこそ、めざましかめれ。

（「藤裏葉」③四六一頁―四六二頁）

朱雀帝の詠歌の様子が、「恨めしげ」と草子地で記される。姥澤隆司氏は、光源氏による完璧な政權掌握の政治情勢の中で既に過去の人となった朱雀帝の寂寥、疎外感の現れであると解釈されている。朱雀帝の詠歌に対し、冷泉帝の詠歌は兄帝を慰めるような歌となるが、「いにしへのためし」は聖代桐壺帝の御代を指し、朱雀帝の御代を称賛するものではない。

「少女」の巻、「藤裏葉」の巻いづれも、朱雀帝の詠歌は現王朝への不満を含むとも受け取られかねない詠みぶりである。「藤裏葉」では「恨めしげ」という部分から、更にその度合いが強くなるが、冷泉帝の返歌がメインとなり、夕霧との容姿の酷似へ話はそれ、朱雀帝の御代に対する執着を表す和歌への言及が一切ない。

朱雀帝が今になって自身の御代を振り返っている部分には、寂寥や疎外感の他に帝位についた者としての意識の残存と考えられる。春日美穂氏はこの様を「妄執」と表現し、帝としての意識を失わないことは、帝としてあるべき姿のひとつではないかと指摘されている⁽⁵⁾。退位した朱雀帝は板挟みからの解放感を感じたが、聖代を実現した桐壺帝の愛児である光源氏、聖代を継承した冷泉帝と一堂に会すれば自身の御代を振り返らずにはいられない。長く沈黙を守っていた彼の、大きな変化が垣間見える。この変化は、朱雀帝を光源氏に対して日陰の立場にあったことからの脱却の兆しではないだろうか。

朱雀帝と光源氏の決定的な差は、即位したか否かという点である。

福長進氏は、「少女」の巻における朱雀院行幸について、朱雀帝が承香殿女御腹の皇子を東宮に指名し、退位することで政治的影響力を保持し、その影響力があるにも関わらず冷泉帝、光源氏の栄華によって内裏から隔たった存在になったことに寂寥感を感じているとしている⁶⁾。朱雀帝が実子東宮の即位により政治的影響力を持つことはたしかであるが、それは東宮を通じた政治的主体を持つことであり、自分自身が帝である御代に主体性を持つことではない。帝として主体性を持つて君臨した桐壺帝の御代と引き比べられている中の詠歌であるため、朱雀帝はあくまで、自分自身が主体、帝となった御代に執着していたと捉えるべきである。

第一部、讓位後の朱雀帝の歌には、朱雀帝自身と、「内裏との距離」がたびたび詠まれる。内裏の外である「しめの外」が詠みこまれ、朱雀帝自身が内裏から既に退出した存在であることが歌われる。次には、朱雀院で日々を過ごしていることを内裏から霞をもつて隔たる「すみか」とし、その距離は開いていく。そして、「藤裏葉」の巻で「恨めしげ」に詠んだ歌では、政治に影響力を持たない自身を「里人」と表現する。

朱雀帝の強引さは第二部で「急変」したのではなく、第一部からその片鱗が見られたことがわかる。主体性の無さによる気弱さ、讓位後の後悔が負のエネルギーとなり、第二部で発露したと考えられる。第一部の朱雀帝は東宮時代、在位中の主体性の無さにより右大臣家の生まれでありながらも、父桐壺帝の遺言を意識し、板挟みに陥る。讓位後の朱雀帝は、「帝」としての自意識を芽生えさせる。帝位についた人間として、光源氏と対立する姿勢を表し始める。「藤裏葉」の巻から、光源氏の栄華に一つの影を落とす存在と位置付け

できる。

三 第二部「若菜上」の巻、女三の宮降嫁における朱雀帝

朱雀帝は女三の宮を、光源氏に降嫁させる。出家後西山寺に入り、夫婦生活を見守るが、女三の宮と光源氏の夫婦仲が円満ではないことを察し、自らの手で出家させる。鈴木宏子氏は、朱雀帝が女三の宮を出家させたのは「心の闇（暴走する親心を自他に認めさせるもの）」によるものだとしている⁷⁾。朱雀帝は降嫁の一連で、女三の宮を憂慮し続ける。しかし、降嫁実行、出家に至らせる部分を暴走と言いつけることが出来るか疑問が残る。朱雀帝は降嫁の失敗を後悔しながらも、光源氏が変わらず女三の宮を後見することを頼みに、光源氏の反対を押し切つて女三の宮を出家させた。第二部でも、後悔をエネルギーとして行動する朱雀帝が見られる。

女三の宮偏愛の理由は、生母を喪っていること、精神的に幼いことが挙げられる。婿には女三の宮を「見はやしたてまつり、かつはまた片生ひならんことをば見隠し教へきこえつべからむ人」（「若菜上」④二七頁）を求めた。光源氏が婿候補に挙げたのは、紫の上を養育した経験による。朱雀帝は光源氏の女性関係について、「方々にあまたものせらるべき人々を知るべきもあらずかし。」（「若菜上」④三五頁）と述べている。光源氏に降嫁させた場合、紫の上に圧倒されることを、女房や乳母が忠告する。しかし朱雀帝は、最終的に紫の上も「方々にあまたものせらるべき人々」に加えた。

紫の上が寵愛されていることは把握しているが、その結婚は正式なものではない。紫の上は妾腹であり、身分は女三の宮に劣る。朱雀帝にとって紫の上は、光源氏が養育した女性で、正妻ではない。

女三の宮が降嫁することに問題はなく、女三の宮が、正妻として扱われることを朱雀帝は確信していた。

「このいはけなき内親王（女三の宮）ひとり、とりわきてはぐくみ思て、さるべきよすがをも、御心に思し定めて預けたまへ」と聞こえまほしきを。」（若菜上）④四九頁

「とりわきて」は、「方々にあまたものせらるべき人々」と対照的である。女三の宮の、朱雀帝に鍾愛されていた様子を、女三の宮の乳母も「かくあまたの御中に、とりわききこえさせたまふ」（若菜上）④三〇頁）と述べる「御心に思し定めて預けたまへ」と光源氏に「親代わり」を依頼するが、降嫁すれば紫の上の地位は低下し、正妻は女三の宮となる。婚姻が済み、西山寺に移ってから後も朱雀帝は消息を絶やさない。消息の内容には、「御心に思し定めて預けたまへ」とあった女三の宮の処遇が「御心にかけてもてなしたまふべくぞ」（若菜上）④七五頁）と変化する。「親代わり」ではなく、女三の宮を妻として遇することを希望している。内親王という女三の宮の身分、正式な結婚をさせることを根拠に、紫の上を問題視しない。自分の身分を光源氏に対して振りかざす朱雀帝が見られる。

四 第二部 「若菜下」、「柏木」の巻で後悔する朱雀帝

薫誕生後、産後の肥立ちの悪さを耳にした朱雀帝は下山して女三の宮と対面するが、女三の宮の願いを聞き入れ、出家させた。

御心の中、限りなううしろやすく譲りおきし御事を承けとりた

まひて、さしも心ざし深からず、わが思ふやうにはあらぬ御氣色を、事にふれつつ、年ごろ聞こしめし思しつめけること、色に出でて恨みきこえたまふべきにもあらねば、世の人の思ひ言ふらむところも口惜しう思しわたるに、かかるをにもて離れなむも、何かは、人笑へに世を恨みたるけしきならで、さむあらざらむ、おほかたの後見には、なほ頼まれぬべき御おきてなるを、ただ預けおきたてまつりしるしには思ひなして、（中略）（朱雀帝）「さらば、かくものしたるついでに、忌むこと受けたまはむをだに結縁にせむかし」とのたまわす。

（「柏木」）④三〇六―三〇七頁

降嫁を朱雀帝は「限りなううしろやすく譲りおきし御事」と思っていたが、女三の宮に対面し、誤りであったと悟る。女三の宮の出家は、光源氏に対し面当てがましい。病気を理由の出家であれば、世間にはそう受け取られまいと朱雀帝は考え、出家を許可した。「おほかたの後見には……」という部分は、夫婦仲を絶つても光源氏が女三の宮の後見し続けることを希望する。愛情はあきらめ、女三の宮の身分と、正妻という立場から、後見は継続されると思ひ直したのである。

（朱雀帝は）帰り入らむに、道も昼ははしたなかるべしと急がせたまひて、御祈禱にさぶらふ中に、やむごとく尊きかぎり召し入れて、御髪おろさせたまふ。（中略）（朱雀帝）「世の中の、今日か明日かにおぼえはべりしほどに、また知る人もなくてただよはむことのあれに避りがたうおぼえはべしかば、御本意に

はあらざりけめど、かく聞こえつけて、年ごろは心やすく思ひたまへつるを、もしも生きとまりはべらば、さま異に變りて、人繋き住まひはつきなかるべきを、さるべき山里などにかけ離れたらむありさまも、また、さすがに心細かるべくや。さまに従ひて、なほ、思し放つまじく」

〔柏木〕④三〇九頁

出家は朱雀帝が率先して指揮をとって行われた。光源氏を、女三の宮の婿ではなく、出家生活を経済的に支える後見としてのみ扱う。光源氏は婿として、女三の宮を粗略に扱うことが、女房や世間を通して朱雀帝の耳に入ることを恐れる。光源氏が女三の宮と円満な夫婦生活を送ることを朱雀帝は期待していた。しかし、女三の宮の出家願望を目の当たりにし、結婚が失敗だったことを悟る。光源氏に託したことを後悔し、以後は光源氏を単なる後見と見なす。この朱雀帝の意識は、同じく降嫁への「後悔」から始まったものであるが、第一部の「後悔」と異なり、そのエネルギーは女三の宮を出家させることにのみ発揮され、以後、朱雀帝は直接物語に関わらない。しかし女三の宮は六条院の女主人として世間から認識され続け、紫の上は死去し、光源氏も出家でできなかった。女三の宮降嫁において、朱雀帝は光源氏や紫の上に対して優位に立ち、権力を振りかざすことによって、憂愁を与え続ける。

おわりに

朱雀帝は光源氏と比較した際に、日陰の立場、負け犬と評価される論が多い。それは、栄華を極めた光源氏に対して、敗北者の印象が朱雀帝にあることによる。しかし、実際の朱雀帝は光源氏に様々

な困難を与え、光源氏に決して思うままの栄華を許さない存在であった。

朱雀帝は赤子時分から「東宮候補」として登場する。在位中は主体性がなく、天皇である自分の境遇に苦しみ続けたが、譲位後、「絵合」の巻から「帝」としての自意識を見出す朱雀帝が見え始める。和歌の贈答をきっかけに、帝に戻りたいと願う。譲位後の朱雀帝の歌には、朱雀帝自身と、「内裏との距離」が見られ、朱雀帝は自分が内裏、帝という身分から遠ざかった存在であることを意識していることがわかる。「藤裏葉」の巻で見せた「恨めしげ」な詠歌の様子は、第二部における主体性を持った朱雀帝による物語の展開の兆しである。主体性をもって御代に君臨することができなかった「後悔」から「動のエネルギー」が生まれた瞬間である。

その「後悔」から生まれたエネルギーは女三の宮降嫁に発揮され、光源氏、紫の上の夫婦仲に綻びが生じる。光源氏は帝位について人間ではないために臣下として女三の宮を六条院に迎える。光源氏と朱雀帝の決定的な「公人としての差」が第二部で生まれる。

朱雀帝は桐壺帝のように子への執着で罪障を抱えることも、「絆」も無く、「人聞きを憚る」事も残さず生涯を閉じた。「御法」の巻、「幻」の巻で光源氏は紫の上の死を追ったかのような出家であると世間に認識されることを避けるため、出家でできなかった。光源氏には「絆」が多く、女三の宮は出家しているが、光源氏自身が進言したことで六条院に住む。紫の上との仲睦まじさは、女三の宮が不遇であると非難され、紫の上が一度息を引き取った際に「かかる人のいとど世にながらへて、世の樂しびを尽くさば、かたはらの人苦しからん。」（「若菜下」④二三八頁）と囁かれた時点で、女三の宮は、

六条院の女主人として世間的に認知されていたと言える。

光源氏は自身の人生を「高き身に生まれながら、また人よりことに口惜しき契りにもありけるかなと思ふこと絶えず」(「幻」④五二五頁)と語る。光源氏の生涯には栄華だけではなく、無類の憂愁も備わっていた。朱雀帝は、その憂愁を与え続け、光源氏に「人聞き」を意識させる。女三の宮降嫁と出家は、光源氏の准太上天皇という權威を、「一代の帝」という「公人」の立場を以て形骸化させた。女三の宮の父朱雀帝に、婿君光源氏は紫の上の苦惱との板挟みに陥る。「二代の帝」である朱雀帝の女三の宮は、世間的にも重んじられ、第二部において栄華を極めた光源氏は「人聞き」を憚ることが多くなる。この過程を確認することで光源氏に対し、明らかに「一代の帝」である朱雀帝が優位にたつたと考えられる。

朱雀帝は、生涯を通して光源氏に憂愁を与え続けた存在である。光源氏は、公人として臣下の域を出ず、無類の憂愁を抱えて生涯を終える。栄華と大団円で完結するのではなく、主人公光源氏が無類の憂愁と共に抱え続けることが、『源氏物語』の一つの在り方であると解釈でき、朱雀帝は光源氏の生涯にその憂愁を与え続ける役割を持った存在と位置付けられる。

注(1) 白方勝「朱雀院の生涯―負け犬の論理とその変身―」『源氏物語の探

究 第一輯』風間書房 一九七四年六月十五日

(2) 重野薫「女三の宮の降嫁―朱雀院にみる無意識の中の復讐心」『KY

ORITSU REVIEW』一八、一九九〇年二月

(3) 藤本勝義「光源氏とその変容(第四章 第二部の朱雀院)『源氏物語の想像力―史実と虚構―』笠間叢書 一九九四年四月二〇日

(4) 姥澤隆司「絶対的優位という閉塞…梅枝・藤裏葉巻における光源氏」『帯広大谷短期大学紀要 三二』、A―A二頁 帯広大谷短期大学 一九九四年三月二十五日

(5) 春日美穂「朱雀院の懺悔―遺言破棄の導くもの―」『國學院雜誌(國學院大學) 第一〇三巻第七号 二〇〇二年七月

(6) 福長進「少女巻の朱雀院行幸」『むらさき 四四号』、六〇―六六頁 武蔵野書院 二〇〇七年十二月

(7) 鈴木宏子「心の闇」がもたらすもの―朱雀院・桐壺更衣母―『むらさき 四三号』、五二―五五頁、二〇〇六年十二月

「心の闇」は諸注指摘するように、「人の親の心は闇にあらねども子を思道にまどひぬる哉」(後撰和歌集・巻一五・雜一・一一〇二・藤原兼輔)を引歌としている。

(8) 「またざりとて、かの院に聞こしめさむことよ」と思ひ乱れたまへる御心の中苦しげなり。(「若菜」④六四頁)、「院に聞こしめさむこと」といとはし、このころばかりつくるはむ」(「若菜上」④七〇頁)等。

(9) 「よそよそにてはおほかなるべし。明け暮れ見たてまつり聞こえうけたまはらむこと怠らむに、本意違ひぬべし。げに、ありはてぬ世いくばくあるまじけれど、なほ生けるかきりの心ざしをだに失ひひてじ」(「鈴虫」④三七八―三七九頁)

(10) 他にも「若菜下」④二〇六頁、「御法」④五一―五三頁でも同じ述懐が記されている。

《本文引用》

・『新編日本古典文学全集「源氏物語」①⑤』小学館、平成六年(一九九四年)